

## 書 評

Joachim Vennebusch : Ein Anonymer Aristoteles Kommentar des XIII. Jahrhunderts. Quaestiones in tres libros de anima. 1963, Paderborn, S. 333

今 道 友 信

かねて思つてゐたことであるが、トマスの哲学の偉大さは確かであるにしても、彼は神学者として、神学部に属する人であるから、哲学と神学の区別はない時代としても、どちらかと言へば神学者であらう。パリやオクスフォードには Siger の他にも、もつと別の哲学者の運動はなかつたものか。十二世紀の哲学精神は十三世紀ではどうなつたのか。それに答へる本の一つはこれであらう。

Vennebusch は本書の序論で古代中世の心理学の歴史を概観して以下のやうにいふ。ソクラテスが哲学的反省の焦点を人間において以来、*ἄνθρωπος* とその *ψυχή* とに関する問ひは西洋の思索の絶対的問題素材に属する。プラトンの思想は人間を中心として巡り、認識するところの不死の魂に滲透しようと努めてゐる。アリストテレスは史上始めて魂についての体系的教科書を編んだ人で、彼の *περὶ ψυχῆς* (三卷) はどの時代の哲学的心理学にも影響を与へてゐる。彼は自らの生物学的傾向に従つて、その著書で人間の魂と動植物の魂——つまり靈魂と生魂——とを一緒に扱ひ、一つの普遍的な魂の定義を企ててゐる。これによつて、アリストテレスは人間を生物の宇宙の内におき、人間に肉体的世界の国籍を与へてゐる。かうして、人間はこの世に於いて、もはやプラトンに見られるやうな流謫の異邦人ではない。しかし、一度このやうに人間を生物学的見地から観察し、人間を生物としてまじめに考察する以上は、アリストテレスが人間の独特の地位、すなはちその靈魂不滅を危険に曝らすのは当然である。彼の書物はかうして人間学上の中核問題にふれ、続く諸々の時代の哲学的心理学的論争に点火する役目をもつた。それゆゑすでに古代に於いても、本書はヘレニズムの折衷派の哲学者や新プラトン派の哲学者たちによつて註釈を附されてゐた。Alexander Aphrodisias,

Themistius, Johannes Philoponus などがこの系列の秀れた註釈家である。また、イスラム文化圏にも本書は受け容れられ、新プラトン主義に変容せられはしたが、この文化圏でも深い影響を及ぼしてゐる。De anima についてのアヴィチェンナの解説やアヴェロエスの註釈が後代にアリストテレスを西欧に知らせるに大きな力があつたことは言ふまでもない。

そもそも教父時代のキリスト教的思索がギリシア哲学を同化吸収しようとした時、プラトンが心理学的領域に於いても権威となつた。教父たちは、アリストテレスを受け容れなかつたが、その理由はアリストテレスの学説は靈魂不滅を脅かすと見えたからである。しかし、よく考へてみると、教父たちがプラトンの心理学を採用してゐることは理に合はないところがある。といふのは、プラトン乃至新プラトン主義は人間の肉体を全く否定的なものと考えたのに対して、キリスト教は元来全くその逆で、肉体には積極的な価値が与へられてゐて、復活に於いて肉体はまさしく不死に参与するものだからである。それゆゑ、キリスト教の内部では、心理学に於いてもプラトン主義とアリストテレス主義の止揚が必要なのであつた。

とにかく、プラトンの心理学が、わけてもアウグスティヌスの形成した姿に於いて、初期スコラ学を支配してゐたことは確かである。その後暫らくこの領域で思弁的進歩はなかつた。しかし十二世紀中葉に、西欧心理学史上特筆すべき進展を生むに至つた或る転機が生じた。すなはち、ギリシア語に長けたヴェネチアのヤコブは1150年頃アリストテレスの他の書物とともにその *περὶ ψυχῆς* をラテン語に移した。それまで中世の西欧の学者が知つてゐたアリストテレスと言へば周知のやうにゴエティウスを介しての所謂 *logica vetus* (*Kategoriai, peri hermeneias*) のみであつた。オルガノンの他の部分 *logica nova* (二つの *analytica, topica, de sophisticis elenchis*) と他の多くの論理学以外の書物は十二世紀の後半になつて次第にスコラ哲学の領域に入つて来た。その中で、*logica nova* は要するに以前から知られてゐた *logica vetus* の続編なので直ぐに受け容れられたが、同じ著者の自然学や形而上学関係の書物は、多くの新しい見解や思想を蔵してゐるだけに、中々滲透してゆきにくかつた。十三世紀前半に於けるアリストテレス禁制の事実は、いかに教会当局が彼の論理学以外の書物には警戒的かつ猜疑的で

あつたかを物語る。そのやうな事情であつたから、十三世紀の中葉、1240年代に Petrus Hispanus が現存最古の De anima 註釈を著したのは勇氣ある行為であつたにちがひない。ところが 丁度1252年にパリ大学人文学部の四つの nationes のうちのイギリスの natio が、まさにこのアリストテレスの De anima についての講義に出席することを、教職候補者に義務づけるといふ事態が生じた。その後すぐに、アリストテレス受容にとつての決定的な年が来た。すなはち、1255年にパリの人文学部全部にわたつての新しい教授要目編制が成立し、それによると、アリストテレスの論理学以外の著書も多く使ふことになつて居り、その中にはもとより本書 de anima も必須講読書として含まれてゐた。ヴェネチアのヤコブの翻譯以来150年の間に、中世の心理学は変容を示し、プラトンの独占は破られ、アリストテレスがこの面でも自己の地位を確立して行つた。もとより、個人的靈魂の肉体から自由な存在の可能性といふプラトンのモチーフは中世のアリストテレス解釈の特色として常に有力であつたことは言をまたないけれどもこのやうな成行きは決して急激に生起するものではない。アリストテレス受容はその歴史をもつてゐる。トマス・アクィナスが自己の体系内にアリストテレス心理学を極めて整合的に取り入れることのできるまでには、それよりは整合性に欠けるところのある、どちらかと言へばプラトン化せられた解釈の前段階が必要であつた。そして、かかる前段階にあたるのがアヴィチェンナの影響によるところの慎重に築き上げられてゆくアリストテレスへの共感である。特色があるのは、例へば、アリストテレスの anima の定義、anima est actus corporis physici. といふ何とも微妙な問題を含む定義についてのこれらの学者たちの判断であらう。彼等はもはや教父や初期スコラ学者たちのやうにこの定義を完全に否定したりはしない。さうかといつてまたこれを本来的な本質の定義とも思ひはしない。本質定義では少なくとも靈魂は独立的実体として認められなくてはならない。つまり、actus すなはち肉体的生命的存在者の部分的実体ではない。アリストテレスのこの定義はそれゆゑ本質を明らかにするのではなく、靈魂に於ける一つの位相を、すなはち、肉体に対しての靈魂の機能を明らかにするものである。

アリストテレスがプラトンの解釈の仮面のもとに中和せられた後に、トマスは一步を進めることができ、且つ、アリストテレスの定義は人間の靈魂の定義にも

あてはまる、と教へることもできた。すなはち、肉体なしには人間の靈魂は完全の意味では実体ではないであらうし、また定義せられえない、と言ふ。してみると、自らの創意と天才とを損ふことなくしてトマスはその先人たちの肩の上に立ち、同時代者たちの成果を取り入れてもゐることがわかる。

かう見てくると、プラトンの心理学から、アリストテレスそのままとは言へないにしても、頗るアリストテレス的な方向をとつてゐる心理学への移行の徐ろな進展のひとつひとつの峰を示すものが中世の *De anima* についての多くの註釈である、と言ふことができよう。そして、ここにそのテキストが出版せられる著者不明の註釈書も、この一群に属するわけである。この註釈家はおそらくパリの人文学部出身の *magister* の一人であらう、そして極めて多くの非トマス主義的なテーゼがあるけれども、トマスの特色をもつアリストテレス主義への途上にある思想家である。彼の註釈は、アルベルトゥス・マニウスやトマス・アクィナスによつて完遂せられたアリストテレス受容の大業が十三世紀の一般的運動とは関りのない孤立した革命的な試みではなかつたといふことを示すものである。本テキストもそれゆゑ他の著者たち、殊にどこかの大学の文学部系統のグループの中でととのへられ、発生して来た運動の一環を成すものと見なさるべきである。従つてこの著者不詳の註釈書の哲学史的意義は次ぎの点に存する、すなはち、この註釈は、キリスト教の人間像のもとにプラトンの伝統から新たにアリストテレス的要素を勇敢に受容しながら、ひとつの新鮮な哲学的心理学を生んでゆく十三世紀の心理学の基礎的変成のための寄与を成してゐる、といふ点に存する。以上が、編者 Vennebusch の序論の大体である。

もともと、Vennebusch のこの仕事は、1958年にルヴェンで開かれた第一回の中世哲学の国際会議に議題にも上り、その必要の力説せられた「中世の主な大学（パリ、オクスフォード、パドワ）に於ける哲学教育の歴史を辿るに足るだけの手稿群全部を印刷出版したい」といふ提言に刺戟せられたことに励まされ1961年にボン大学の博士論文（Dissertation）として受納せられたものである。彼の指導者は Vinzenz Rūfner である。この仕事によつて、我々は少くも、トマス以前の、諸大学の人文学部のアリストテレス研究の概観を知るためのひとつの手がかりをうることができ、それは従来の、神学部関係の資料に偏した中世哲学史研究とは

全く異つた、別の面からの考察といふ意味でも、新鮮味のあるものと評価されてよいであらう。たしかに、大神学者の神学体系を無視して中世の哲学は論じられはしないであらうが、しかし、それにも拘はらず、諸大学に於いてものすさまじい程も純粹に哲学的であつた人文学部の教授たちの哲学を発見し直すことは、もし可能ならば、極めて興味深いものがあらう。さうすることによつて、十二世紀の嵐のやうな烈しい革新の精神との連続が十三世紀、十四世紀を貫いてゐることが今までとは別の形で認められるかも知れないからである。従つて、誇大になるのを避けながら語るにしても、このやうな地味な仕事の絶えざる積みかさねは、やがて大神学者を中心とした中世哲学史の今までの型とは全く違ふ内容のものが書かれる基礎になるかも知れないと附言しておきたい。

ところで、この研究もその源は例の Martin Grabmann に発するやうである。といふのは、本書でも指摘せられてゐるが、グラブマンはすでに *Handschriftliche Forschung und Funde* の p.115 に於いて、「私は十三世紀初期の若干の著者不詳の註釈、特に *De anima* の註釈書をも発見したが、それらはいづれもトマス・アクィナスの哲学の傾向で書かれて居り、おそらくは未だ知られてゐないパリ大学人文学部の一教授の手になるものにちがひない。これらの中で *De anima* 註釈書、すなはち、Cod. Admont Stiftsbibl. 367. f. 9r—35v の中に収まつてゐるのは、極めて重要だと印象を与へてゐるから、いつか他の機会に論じたい。」と言つてゐる。1949年1月9日のグラブマンの死は、彼のこの計画を彼自らの手では実現せしめなかつた。しかし、ここで言及せられてゐる Cod. Admont Stiftsbibl. 367 こそが、今 Vennebusch の解読出版したものなのである。

Admont (Steiermark) のベネディクト会立の図書館にあるこの羊皮紙の手稿は、革と木の製本で、その大きさは210×262mm、厚さは35mm、86枚の羊皮紙から成り、そこには書き手の異つた色々の著作が収められてゐて、必ずしもアリストテレスの註釈だけではない。例へば、表紙のリストでは Avicenna や Aegidius Romanus の名も見える。尤も、ここで Aegidius に帰せられてゐる *De bona fortuna* といふ本は、中世に流布したところのエウデーモス倫理学と *magna moralia* からの抜萃であつて、つまりはアリストテレスのもののラテン語抄訳のことは周知のことであらう。前述したやうに、グラブマンはこの Codex を始めて公刊

の論著の中に於いて言及した人であるが、同時に Vennebusch までは彼以外にこれに言及した人はみなかった。

De anima の稿本は綺麗に読める十三世紀風の書体で、平均55行のものが一枚の Folio に二列に分かれて何の区切りもなしに書かれてゐる。下部にかなり長い脚注が別の人の手で書きこまれてゐる頁が五つほどあるといふことで、丁度さういふ頁の典型にもなる最初のフォリオつまり Admont Stiftsbibl. Codex. lat. 367, f. 9r の写真も一葉添へてあり、これはかなり鮮明であるから、その部分がテキストの印刷形態では本書92頁から96頁にわたるので、照合して読めばパレオグラフィの練習としても使用できるであらう。写本解読の仕事は言はゞ職人の手業であつて、それに没頭してしまへば、もはや哲学することからは離れてしまふおそれがあることは、グラープマンの書物のおよそ非思索的平板性を見れば、それでも充分に証拠づけられる、とも言へよう。確かにさうではあるが、しかし、埋もれてゐる中世哲学の真相を明らかにすることは、哲学する精神にとつて決して無縁のものではあるまい、何故ならば、山積する未公開の写本の中には未だ知られない問ひの提出や解答の試みがあるかも知れず、或ひはそのことを暫らく慮外に置くとしても、中世哲学の歴史を今日知られてゐる形に止めておくことは果たして学問的なのであらうか、もし哲学史が哲学にとつて普通の学問の場合と違つて精神の客観化、精神の反省的形態、精神の作品への巡歴として独特の意味があるのだとすれば、大変なことだからである。従つて、中世の哲学的写本の解読も単に文化の実証的研究の資料といふばかりではなく哲学にとつて確かに少しは意味がある、といふことを意識してよいであらう。さうであるとすれば、古典語の現代語対訳の本があつてそれが古典語の独習に便益があるやうに、写本の活字体との対照本がパレオグラフィの独習にも役立たうから、この際費用はともかくとして、中世哲学会の思ひ切つた仕事の一つとして、さういふものを作つてみるのもよいことではないか。学会は研究の水準を上げるためにも何とか財源を豊かにして、かういふ劃期的な研究体制の確立や埋もれてゐる会員の業績の出版や大きな大学への講座施設等の設置に向かつての努力などを実践的に企ててゆかなくてはならないと思ふ。もとより、さういふことで一番大切なのは現段階の日本では先づ翻訳と註釈であることは確かであらうが、さういふものを学会から出版

してゆけるやうにしてみたいものである。

ところで、Vennebusch は解読結果の印刷に際しては、最初の形としては当然さうあるべきであるが、できるだけ写本の原形に従つた。それゆゑ副文章の場合、本格文法では当然接続法が来なければならないところもそのまま直接法を使ひまた字も、それゆゑ、*historia* も *hystoria* であり、*essentia* も *essencia*、*ratio* も *racio*、甚だしきに至つては *totius* までも *tocius* (例へば *Quaestio 34*. 本書p.183) である。かういふ例を見ても十二、十三世紀のラテン語発音の実態はおよそ把握できるであらう。もし、我々が歴史的に忠実であらうとして、*Cicero* を古典的発音を以てキケロとするのが正しいのであれば、これら中世哲学に於いては、*Ci* は *ti* と間違はれてゐるやうな事実から、それはもはや古典的なキではなくてむしろチであることは、今更言ふまでもないことであらうし、それが歴史的に忠実な態度である。さて、写本原形では章節の区分は何もないが、校訂者はこれを 70 の *Quaestiones* に分かれてゐると見なして、印刷体ではそのやうな明快な形態に整理してあつて、その点は非常によいが、結局例へば *Quaestio 1* にしてもこれに *Q. 1a*, *Q. 1b* といふ附問があつて総数では 106 の *Quaestiones* である。そして、その附問と本問とを差別した校訂者のよつて立つ原理は定かではない。さういふ点は今少しく判明に論及しておいた方がよかつたかと思ふ。尚、読み改めをあまりしないやうにした、といふ校訂者であるが、*Quaestio 2* のところを仔細に検討すると、写本では *corporalis* とあるのを前後の関係から二三行前にも出てゐる *essentialis* の誤記であらうと考へてか、そのやうに読みかへてゐるのは、遽かには同じ難い。ここはすぐあとの *animata* も *animati* と読み改めてゐるが、私は原写本の通り、*pars corporalis corporis animata* のままで解釈する方がよいのではないかと思ふ。つまり、校訂者が「生物の肉体の本質的部分」と言ふのに対し、「肉体の肉体らしい生命づけられてゐる部分」とするわけであるが、かう読むことによつて、写本のままで写本の原著者の意図もよくわかるのではないか。

編者はこの未詳の著者が同じくアリストテレスを受けながらトマスの学説と根本的に違ふ点を色々あげてゐるが、例へば、あのよく問題になる *παθητικός νοῦς* Arist. De an. III. 5. 430 a 24) をトマスは *intellectus passivus* (Thomas

In De am., III. lect. 10. n. 745) とするがこの *magister* は Q. 67. ad 3. で明らかかなやうに *intellectus possibilis* と同一視することを指摘してゐる。これは一見小さなことに見えるかも知れない。しかし、これは我々の著者が *intellectus agens* と *intellectus possibilis* の二元性の人間に於ける意義をいかに高く評価してゐるかの証しであり、*intellectus agens* は認識対象のみならず、認識主体にも関する二重超越性をも明示してゐる。その点では、編者のいふ通り、Albertus Magnus との類似はあらう。とにかく、このテキストを精読することは、十三世紀に神学者とは別の哲学者のうごいてゐた人文学部乃至文学部のひとつの精神運動を知るよすがになる点は疑ひない。

テキストの校訂といふ書物なのに、表紙に大きな字の誤植による脱字があるのは、ユーモアを通りこして、印刷への不安を呼ぶ。